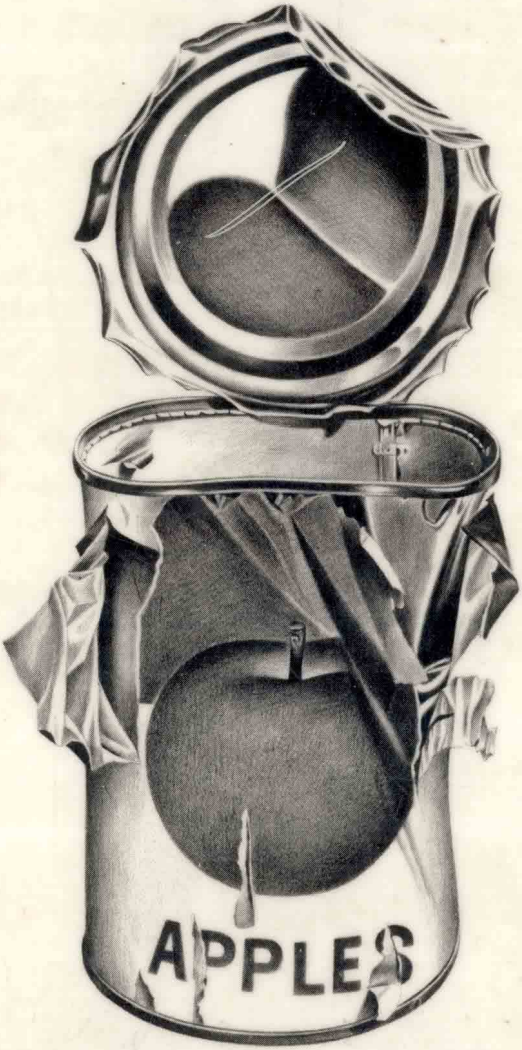
父が消えた

尾辻克彦



尾辻克彦

父が消えた

五つの短篇小説

1981

文藝春秋版

著者略歴

本名・赤瀬川克彦。昭和十二年、横浜市に生まる。武蔵野美術学校中途退学。現在、「美学校」講師、イラストレーター、文筆業など活動は多彩。昭和五四年、「肌ざわり」で中央公論新人賞を受賞、同作品で芥川賞候補に推さる。昭和五六年、「父が消えた」で第八四回芥川賞を受賞。作品集として『肌ざわり』、ほかにエッセイ集として『少年とオブジェ』などがある。

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

父が消えた

一九八一年三月十日　第一刷

著者　尾辻克彦

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―一二一一

定価　九八〇円

印刷所　凸版印刷

製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©Katsuhiko Otsuji 1981　Printed in Japan

尾辻克彦　五つの短篇小説

父が消えた　5
星に触わる　63
猫が近づく　115
自宅の蠢き　165
お湯の音　225

裝釘　福田隆義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

父が消えた

五つの短篇小説

父が消えた

三鷹駅から東京発の電車に乗ると、ガタンといって電車が動いた。電車はどんどん動くので私は嬉しくなった。こんなこと、まったくいい歳をしてばかな話だけど……。でもいつもと反対の電車に乗ると、よくこういうことがある。

私はいままで、この三鷹駅からは東京「行き」の電車にばかり乗っていたのだ。だけど今日は三鷹駅から東京「発」の電車に乗って、八王子の墓地へ行ってくるのだ。電車はいつもの三鷹駅の固まった風景を、もう一枚めくるように動き出した。いつも見慣れていたつもりの風景が、どんどんめくられて通り過ぎて行く。珍しいことである。電車というのは反対に向うとじつにどんどんと動くのだ。この電車が動くという感じが嬉しくなってくる。

そもそも旅行の楽しさというものは、乗物が動くということではなかろうか。

子供のころ、町の中を通る荷馬車のうしろに、こっそり飛び乗って遊んでいた。私にはそれが旅行のはじまりだったと思う。自分の足を動かさなくても、乗っている物がひとりでに動いて行く。それがじつに楽しいのだ。

「でも馬車なんて、見たこともないだろうね」

私は同行の馬場君にいってみた。馬場君は私が東京行きの電車の神田で降りて行く学校の、

二年前の生徒だった。いまは雑誌社に勤務している。今日はお休みである。

「馬車はね」

馬場君はむつりと答えた。馬車はねといった「ね」のつぎに、見たことないですよというのがつづくのだろうが、馬場君はそこはもう当然のように略して黙っている。背の高い、目の小さい人で、赤い頬の吹出物が印象的である。『生活』という雑誌の編集部にいる。今日は私のおつき合いである。

「でも不思議だね、昔は町の中を荷馬車が平気で通っていたんだから。道路の真ん中にね、馬糞をボタボタ、あたり前みたいにこぼして」

「へえ。凄いですね」

「凄いよ。いまだったら物凄い迫力ね。むき出しの馬糞だよ」

「むき出しだって……」

「そうだよ。みんなが服を着て通っている町の中で、むき出しの馬糞が上の方からボトン……、て落ちるんだもの。いまだったら大変だね。不衛生、不法投棄、人の迷惑も考えないでって、もう飼主の責任問題になってくるね」

「そりゃもう裁判ですよ」

「でも昔はそれがあたり前だったんだからねえ。いまだったら道路に落ちてるのはコーラの空罐ばかりだけど、昔はあれが全部馬糞だったんだからねえ、ナマの馬糞だよ、むき出しの馬糞」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「あんまりそう馬糞、馬糞て、強くいわないで下さいよ」
馬場君は伏目になって苦笑いしている。
「あ……」
そうか、名前がいけない。いや名前はいいけど、話題がいけない。
「でもねえ、不思議な気がする。あんな風景、たった三十数年前のことなんだから……」
「え、三十数年……」
馬場君はいま二十五歳。私は黙った。ちょっと黙って、当てもなく車内を見回して、右手から左手に吊革を持ち替えてみた。あいた方の右手は、シャツのボタンをいじったりしている。窓の外を見た。電車はどんどん風景をめくって走りながら、風景をめくる風がヒラヒラと頬に当たる。はじめて頬に当たるような新鮮な風である。私はまた楽しくなってきた。これはやはりこっそりと、荷馬車の後に乗っている感じ……。小学校の二年生のころだった。学校から町の清掃にかり出されて、みんなで道路の馬糞を拾い集めた。ブリキの大きなチリ取りを持ち出して、最初は棒の先で拾っていたのが、しまいには面倒になり手づかみになってしまった。人間の糞は体の中をねちねちと通ったみたいで嫌になるけど、馬糞というのは物が素通りしているふうなのだ。物だと思えば平気なのだ。よく考えたら工作の時間にはいつも馬糞紙に触っているではないか。この道路の馬糞にしても、拾い集めたら結局は全部馬糞工場に運ばれて、いずれ馬糞紙になるのだろうと思ったりしていた。だけど馬糞と馬糞紙の関係については、いまになってもその真相を知らないままでいる。馬糞紙って、本当に馬

糞から出来ているのだろうか。
「馬糞紙のことだけどね」
「え？」
「いや、図工なんかで使う厚紙だよ」
「あ、ボール紙でしょ」
「あ、そうだ、ボール紙だったな。ボール紙か……」
「まだ馬糞のことを考えてるんですか」
「いや、ボール紙のことなんだけどね……」
私はまた吊革を持ち替えた。ちょっと目の縁をこすってみたりした。どうもいけない。馬糞のことではないのだった。荷馬車のことなのだった。そもそもは動くということなのだ。この頬に当たる風のこと。風景をめくっていく風のこと。

昔やっぱりガタンと動いた汽車があった。九州の大分から引越して来るときだった。夕方の大分駅だった。たぶん夕方だったと思うのだけど、そのころの大分駅といえば、いつも夜中ばかりを思い出す。それも夜明け前の、いちばんドン詰まりの夜中なのだ。兄が旧制の中学を出て上京するときもそうだった。まだ月が出ている、みんな寝静まった町の道路なのだ。オーバーの襟を立てながら、家族全員でぞろぞろと見送りに行った。そんな暗い町を、ほかには誰も歩いていなかった。それでも駅に着くと、まわりには何人かの人がボソボソと汽車

を待っていた。電球が一箇所か二箇所だけ、チカリと光っていて、みんな静かに押し黙っていて、何か話すにしてもヒソヒソと小さな声で、ほんの短い単語で、その単語といっしょにもれる息だけが白く、湯気のように出ていた。そうすると夜の向うの方から、これもまた吠える声をじっと隠した、鉄のライオンのような機関車がやって来て、これも近づくとゼイゼイと白い息を吐き出しながら、線路の上に重しのようにズシリと止まる。駅で待っていた何人かの人々は、まるでその獣の殺気に感じたように、みんな緊張して姿勢を正し、荷物をしっかりと握り締める。そしてその鉄のライオンの牙のあたりをチラチラと盗み見て、怒らせて噛みつかれては大変と、体中で気をつけているかのように、そうっと足を踏み入れて、その中に歴史的に乗り込むというふうだった。兄の上京のときがそうだったし、姉のときもそうだった。父の転勤のときもそうだった。いずれのときも夜中の四時ごろに起き出して、暗い中をみんなでぞろぞろ見送りに行くというのが、当時まだ小学生になったばかりの私に、事の重大さを教えてくれた。いま考えると何故いつもそんな時間なのか不思議だけど、たぶん当時のダイヤの都合で、大分駅ではそうなるほかに仕方がなかったのだろうと思う。黒い鉄のライオンがぎしぎしと去って行って、みんなが寒々とうつむいて帰るころ、町の道路がほんのりと白くなっていた。

　だけど転勤の父につづいて家族全員が引越すときには、夕方の大分駅になっていた。たぶんその後のダイヤ改正で、大分駅にも便利な時間が出来たのかもしれないけれど、いずれにしてもただ漠然とした子供の頭の記憶なので、あてにはならない。

家族の引越しは十年振りのことだった。それまではほとんど二年おきくらいに引越しをしていたらしい。東京からはじまって、四日市、名古屋、横浜、芦屋、門司、そして大分に来てから十年である。私は横浜で生まれたので、記憶にあるのはせいぜい芦屋からだけど、その前のまだ私のいない家族写真には、端の方に「ねえや」が一人写ったりしていた。だけど私は「ねえや」なんて、吉屋信子の小説でしか読んだことがない。ねえやどころか、私はいつも玄関に立ってじっと中を睨む人の硬い顔を、襖の隙間からのぞき見ていた。その顔は額や頬の筋肉が蟹の甲羅のようだった。それは借金取だと上の兄姉から教えられた。だけどその顔はいつも見たことのある米屋や八百屋や乾物屋の人なのだった。その人たちがうちの玄関にじっと立つと、その顔が脂汗を塗り込んだ蟹の甲羅のようになるのだった。そんな顔をのぞき見ながら、いつも貧乏のコンプレックスというのを人一倍もたされていて、それをまた人一倍奥の方に温存していた。

温存というのもおかしいけれど、私には支えがあったのである。支えといってもマイナスの支えで、私はその引越しの前の年まで、重度の夜尿症に悩まされていた。中学の三年までの毎晩である。一晩に二度三度と漏らすこともあった。私の体はいつもアンモニアの匂いに包まれているようだった。家族は三部屋に分かれて寝ていたけれど、私の寝る部屋の畳は私の水分で徐々にへこみはじめ、へこむたびに布団の場所を変えたりしながら、結局は十年間の私の夜の小便で、その部屋の畳は全部へこまされてしまった。いま自分で考えても驚くほどだ。いまにして思えば自分の肉体が恐しくなってくる。だけどそのさなかにあっては、そ

の恐しい肉体をもてあますことで、貧乏の圧力とのバランスをかろうじて保ってきていたのだった。思えば悲惨な綱渡り。

その引越しの駅には十年分のたくさんの人がいた。私の家は兄弟が多く、それぞれに友達も多かったので、見送りの人たちが団体みたいになっていた。私は上から五番目で、その下に六番目と七番目もいたのだけど、私の友達も大勢いた。コンプレックスを奥に秘めての友達、一番目の親友、二番目の親友、本当は一番好きだった人、本当はそのつぎに好きだった人、そういう人たちが大勢で汽車の方を見送っていた。賑やかで、私には寂しさも悲しさもなく、まるで友達もみんないっしょの旅行のような雰囲気だった。だけどそれは当然ながら旅行ではなく、もう会えない遠い町への引越しなのだった。汽車がガタンと動いたときに、私ははじめてそれに気がついたようだった。あっと思った。私はホームと同じ高さのデッキのところに立っていたのだけど、そのデッキが横すべりに動き出して、友達の顔が一番目も二番目も遠のいて行って、全部がひとかたまりになっていく。あっ、そうじゃない、ちょっと待てよという気持だった。それならそれでちょっとやり残したことがあったはずだと、私は慌てて右手を前に出した。だけど右手は空をつかんで、それがちょうど手を振っているような格好になり、駅のみんなもいっせいに手を振った。回転をはじめた鉄の車輪に揺れながら、その光景がさーっと遠くに去って行き、平穏だった私の表情がさーっと顔面から流れ落ちた。何か大変な失敗をしたという、その冷や汗のようだった。だけどもう取りかえしようもなくゴトンゴトンと汽車は動きつづけて、空をつかんだ右手はハタハタと風に打たれて、

駅が遠く縮んで小さな斑点になっていく。あとは客席の窓から風景がどんどん横に通り過ぎるだけだった。私はまるで不安な宇宙船に乗り込んでしまった気分であった。そうやって、私たちは大分からまた名古屋へ引越しをした。

あのときもガタンという大きな鉄の車輪の回転が、その上に乗っていながら目に見えるようだった。いまもこの三鷹駅から乗っている鉄の車輪の回転が、風景をぐいぐいと動かしていく。

「やっぱり反対はいいねえ」

私は同行の馬場君にいってみた。

「賛成ばかりではぜんぜん旅行にもならないねえ」

「え？」

馬場君は、え？　と疑問を発しながらも、またその先を省略している。疑問符だけである。もっともよく考えてみたら、馬場君にはまだ何も説明していないのである。大分駅のことも、汽車のことも、車輪の回転のことも。

「いや、旅行というのはただ動けばいいんだなと思って」

「動く」

「動くといってもね、いつもと反対に動く。いつもと反対に動けば旅行ができる」

「うわ、それ、教訓みたいですね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.